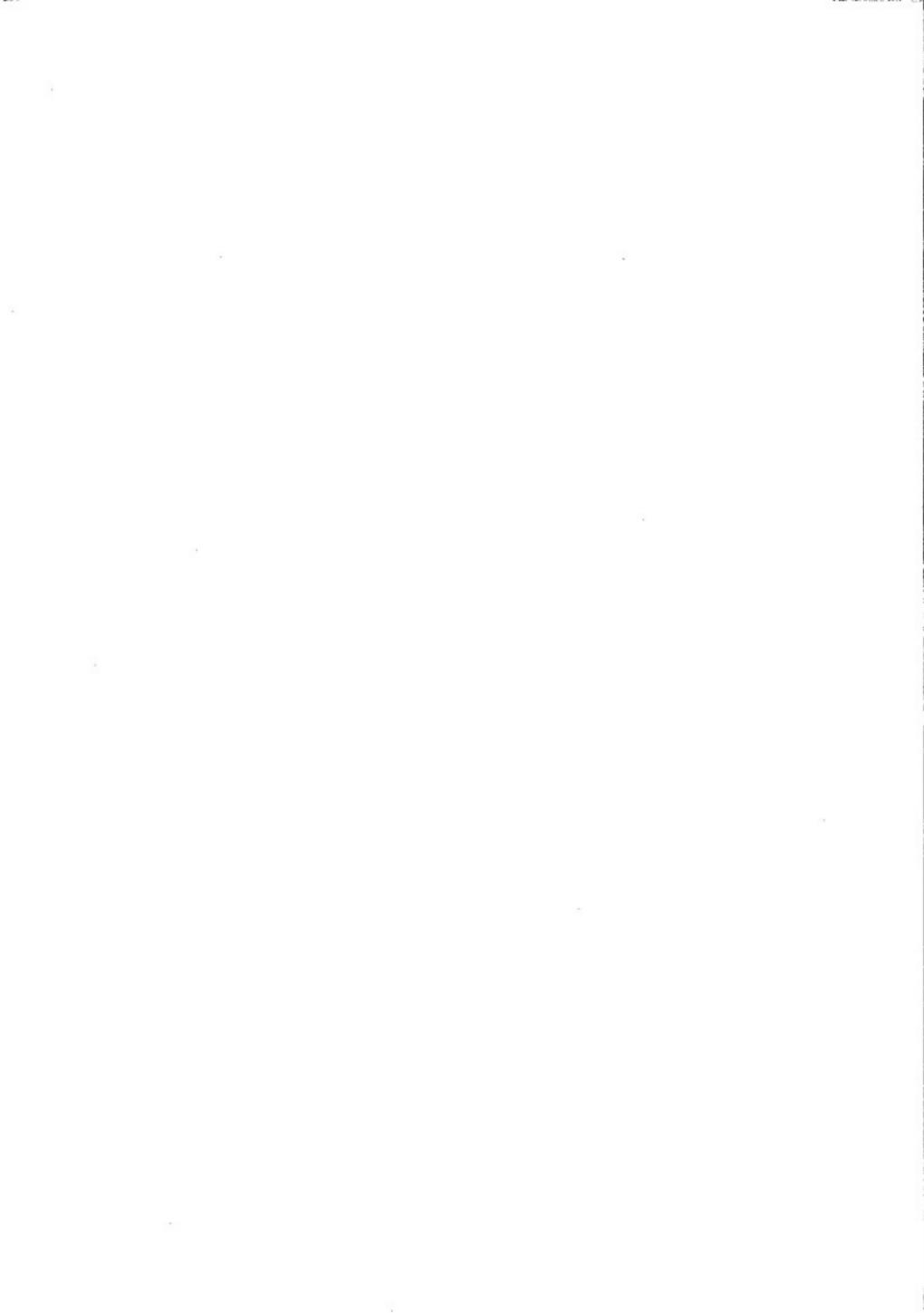


男里遺跡発掘調査概要・III

——府営地域総合オアシス整備事業（泉南地区・双子池改修工事）に伴う——

1998. 3

大阪府教育委員会



はしがき

わが国を代表する24時間空港である関西国際空港が開港しまして3年が経過いたしました。一時期落ち着きを見せていました空港に伴う泉州地区の開発も空港の全体構想が具体化するにつれて、ふたたび活気に満ちてきました。その一方で、開発に伴う発掘調査が増加し、ここで報告いたします男里遺跡も例外ではありません。

男里遺跡では弥生時代から中世の集落などが確認されており、泉州でも屈指の複合遺跡といえます。とりわけ、弥生時代中期においては拠点集落として、周辺地域の代表的な集落であったことがわかっています。

今回の調査は、府営地域総合オアシス整備事業（泉南地区・双子池改修工事）に伴うもので、今年度で3年目をむかえ、今回の調査では従来の調査に対応すると考えられる自然流路などの遺構が検出されました。また、双子池堤体の築造年代を窺わせる良好な資料が鍵門にあたる調査において得られました。これらのデータの蓄積が男里遺跡の動態のみならず、泉州地域一帯の歴史研究にかけせぬ資料となることでしょう。

最後になりましたが、本調査にあたり地元関係者をはじめ多くの方々の御協力によって進めることができましたことを深く感謝いたします。今後とも本府文化財保護行政に対してより一層の御理解、御協力を賜りますようお願い申しあげます。

平成10年3月

大阪府教育委員会

文化財保護課長 鹿野一美

例　　言

1. 本書は大阪府教育委員会文化財保護課が、大阪府農林水産部より依頼を受けて、平成9年度に実施した泉南市男里所在、男里遺跡の府営地域総合オアシス整備事業（泉南地区・双子池改修工事）に伴う第3次発掘調査事業の概要報告書である。
2. 調査は大阪府教育委員会文化財保護課技師 上林史郎を担当者として実施し、泉南市教育委員会社会教育課文化財保護係 大野路彦氏の協力を得た。調査は、平成9年9月25日に着手し、平成10年3月31日に終了した。
3. 調査の実施に際して、地元関係者及び大阪府泉州農と緑の総合事務所、泉南市、泉南市教育委員会、（財）大阪府文化財調査研究センターより多大なご協力を賜った。深く感謝の意を表したい。
4. 本書の執筆は大野が、編集には上林があたった。

凡　　例

1. 遺構配置図の縮尺は1/250とし、遺構実測図の縮尺は1/40ないし1/80としている。
2. 発掘調査及び、本書記載の基準高はT.P.（東京湾平均海水位）+を使用しているが、遺構実測図ではT.P.+は省略している。
3. 遺構配置図及び遺構平面図には国土座標VI系に基づく、X・Y座標を表記しており、図面の方位は座標北を示す。
4. 遺構名称は、一部を除きアルファベットと任意の数列の組み合わせで表している。アルファベットは、S D—溝、土坑—SK、Pit—柱穴をそれぞれ表す。
5. 土層の断面は、平面図中に指示線とアルファベットによって示され、その場所が一致する。
6. 図示している遺物の縮尺は1/3とした。また、遺物の断面は、須恵器—黒塗り、弥生土器・土師器・土製品—白抜き、瓦器—トーン、瓦—斜線のように塗り分けた。また遺物実測図と写真図版の遺物番号は統一している。
7. 土層の色調は、小山正忠・竹原秀夫編『新版標準土色帳』（1988）に準拠した。

本文目次

第1章 調査にいたる経過.....	1
第2章 調査の方法.....	3
第3章 男里遺跡をとりまく環境.....	4
第4章 調査の成果	
第1節 基本層序及び遺構面の概略.....	7
第2節 遺構.....	7
第3節 遺物.....	12
第5章 まとめ.....	14

挿図目次

第1図 泉南市及び男里遺跡の位置.....	1
第2図 調査区位置図.....	2
第3図 調査区の地区割り.....	3
第4図 遺跡分布図.....	6
第5図 S D02平面図及び断面図.....	8
第6図 調査区断面図.....	9
第7図 遺構平面図及び断面図.....	11
第8図 出土遺物.....	13

図版目次

P L. 1 遺構配置図	P L. 8 遺構③
P L. 2 調査区全景	P L. 9 遺構④
P L. 3 調査区北半部①	P L. 10 遺構⑤
P L. 4 調査区北半部②	P L. 11 出土遺物①
P L. 5 調査区南半部	P L. 12 出土遺物②
P L. 6 遺構①	P L. 13 出土遺物③
P L. 7 遺構②	

第1章 調査にいたる経過（第1・2図）

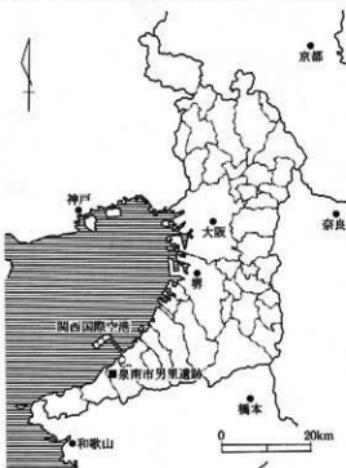
泉南市は、大阪府の南西部に位置する。北西は大阪湾に面し、南は和泉山脈で区切られて和歌山県に接し、北東は櫻井川、南西は男里川の両河川に囲まれている。さらに、泉州沖約6kmには日本を代表する24時間空港である、関西国際空港が位置している。

男里遺跡は、泉南市の南部に位置し、双子池を中心に東西約1.1km、南北約1.3kmの泉南市最大の複合遺跡である。一部後述するが、本調査のような双子池堤体改修工事に伴う調査（大阪府教委担当）、個人住宅を対象とした国庫補助事業の調査（泉南市教委担当）、民間開発に伴う調査（泉南市教委担当）、本遺跡の中心を東南から北西に抜ける空港関連道の主要地方道泉佐野・岩出線建設に伴う調査（財団法人大阪府埋蔵文化財協会・同大阪府文化財調査研究センター担当）など、本遺跡では開発に伴う発掘調査が多数おこなわれている。

泉南市の地形は、和泉山脈から海岸線に向かって派生する丘陵、洪積段丘が大部分を占めており、沖積地は櫻井川、男里川の周辺に限定される。このような地理的制約から、農業用水の確保は、専ら溜池を中心とした水路網である。現在泉南市域における溜池の数は約100を数え、築造年代が古い溜池が多く、築造以来、補修、改修をおこない維持管理してきた。しかし、近年堤体の漏水や取水施設の老朽化が顕著になり、防災上の危険性からもその対策が求められてきた。このため、大阪府農林水産部では安全上および農業用水の効率的な確保などの理由から、「地域総合オアシス整備事業」を計画するにいたった。

本遺跡が所在する男里地区における農業用水の確保先は双子池である。双子池は、男里遺跡のほぼ中央、大阪市内から和歌山市に向かう国道26号線から北西に約0.8km、府道堺・阪南線から南へ約0.1kmの地点に位置する。双子池は、池のほぼ中央が市道によって分断されており、南側を上池、北側を下池と呼称されている。古くは延宝7年（1679）に鳥取庄内の天領地でおこなわれた検地において測量の対象となり、その検地帳の奥書には「上池床百二十四間六十七間（中略）慶長十八（1613）丑年出来」「下池床九十六間六十一間（中略）寛永三年（1626）寅年出来」と記されており、すでに江戸時代初期には面積が現在とは違うものの、上池と下池に分断されていたことを知ることができる。

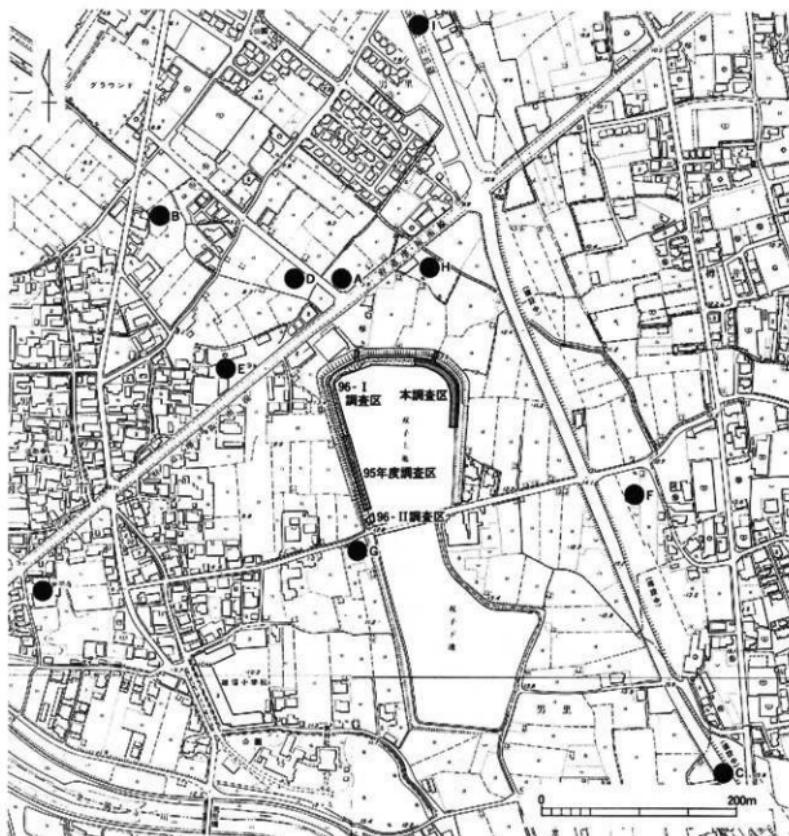
今年度の調査区は、大阪府泉州農と緑の総合事務所が「地域総合オアシス整備事業」の一環として、双子池の堤体改修工事をおこなった95年度調



第1図 泉南市及び男里遺跡の位置

査区（下池南西部、幅約7m、長さ約78m、面積約550m²）、96年度調査区（下池北西部、I区幅約6～7m、総延長約170m、面積約1,000m²）の東側（下池北東部、幅約6m、総延長約100m、面積約600m²）を調査の対象とした。平面形態は逆L字形を呈しており、さらにその北辺には北に抜ける通門部分も含んでいる。調査は文化財保護課技師上林史郎が担当し、泉南市教育委員会社会教育課文化財保護係大野路彦氏の協力を得た。

なお、調査の実施及び本書の作成にあたっては、植田哲也、江尻美代子、岡井和彦、奥田桂、片木直幸、蒲生徹幸、河村公美子、熊田聖子、藏田弘幸、島津真理、中谷めぐみ、福井元気、藤野涉、向林智与、村田純一の援助を得た。また、仮屋喜一郎、岡田直樹、石橋広和、岡一彦、城野博文、河田泰之、地村邦夫の諸氏には教示、協力をいただきました。記して感謝いたします。



第2図 調査区位置図

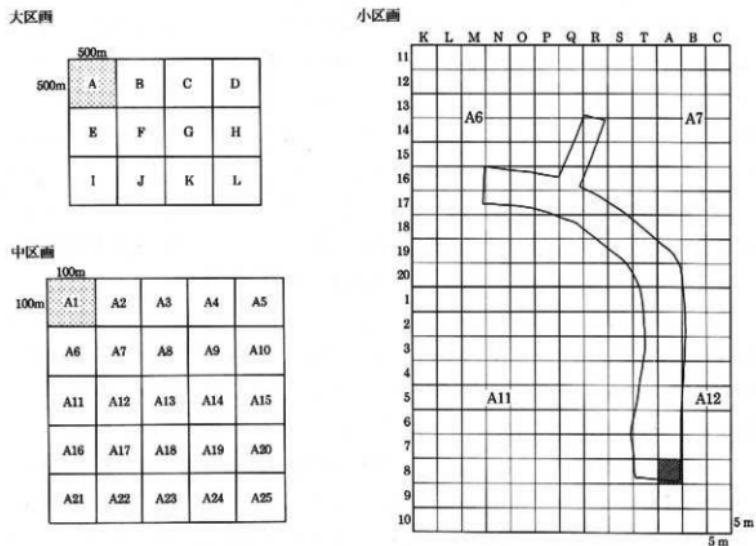
第2章 調査の方法（第3図）

調査区の掘削は、平成7年度に実施した試掘調査の成果をもとに、バックホウにより堤体の盛土、池底へのドロを除去し、以下を人力掘削とした。

調査精度を高めるため、調査区の地区割りをおこなっている。本調査は、平成7年度からの継続事業であるため、過去2カ年にわたりおこなわれた調査の地区割りと対応する、国土座標VI系にもとづく5mの方形区画を使用した。なお、この方形区画の設定は、大阪府都市計画図(1/2500)の地形図をもとにしている。この地形図を12等分した500mの方形区画(大区画)をつくり、AからL間での記号を付す。この一区画をさらに25等分し、100mの方形区画(中区画)をつくり、01から25までの番号を付す。この100m区画を400等分したものが5×5mの最小単位の方形区画(小区画)となり、X軸はA～T、Y軸は1～20で示される。

このようにして設定した区画は、実測や遺物の取り上げなどの基準となり、地区名は北西隅の杭番号によって代表されることとした。例えば、斜線部で出土した遺物の地区番号はA12-8Aとなる。なお、東西軸については、1A～1Tの次は2A～2Tとなる。

また、調査の迅速化、省力化をはかるため、航空測量による図化作業(1/20)も実施した。



第3図 調査区の地区割り

第3章 男里遺跡をとりまく環境（第2・4図）

男里遺跡は、大阪府の南端部にあたる泉南市に位置する。市域の西端部を流れる男里川右岸に立地しており、遺跡の立地を地形分類的に概観すると、男里川右岸に拡がる沖積段丘面のほか、男里川及び旧河道によって形成された自然堤防や氾濫原、また旧河道そのものなどが含まれている。このうち旧河道については今回の調査対象となった双子池がその痕跡であるとされ、双子池を挟んで南北に伸びるものと考えられている。

本遺跡は、泉南地域において調査の最も進んでいるもののひとつとして数えられ、今まで多くの調査が実施してきた。現在のところ、縄文時代晚期から近・現代にいたる複合遺跡として周知されている。これらの調査成果に基づいて、以下に男里遺跡および周辺の歴史的内容を概観していくこととする。

今回の調査は継続して行われる発掘調査の3年目にあたることから、まずはじめに平成7年度と平成8年度に行われた調査の概要をみておきたい。平成7年度は双子下池の最も南西部からの調査となった。調査面積は約550m²である。調査では弥生時代後期～古墳時代前期と、飛鳥～奈良時代の2時期にわたる河道が確認された。その調査で出土した土器群は、自然流路からの出土ではあるが、一括資料としての評価が与えられるものもあり、泉南地域における土器様相の一端を示すものとして注目される^①。またこの年には、今後の発掘調査に備えてのデータ収集のために堤体にそって試掘調査を実施している。

平成8年度は前年度の調査区に接続する形で、馬蹄形を呈する双子下池の先端部分、北端部の調査が実施された。また、平成7年度調査区に南接する下池南西端部の調査も併せて行った。調査面積は約1050m²である。調査では平成7年度に引き続き、大きく2時期にわたる溝やピット群、自然流路などが確認されている。なかでも注目されるのは7世紀中葉から8世紀にかけて構築されたと考えられる「しがらみ」を伴う自然流路が確認されたことである。周辺に生産域が想定され、当時集団で灌漑管理をおこなっていたことを示唆するものである^②。このように2カ年にわたる調査の成果より、おおむね2時期の遺構や遺物が確認され、それぞれ周辺に集落が存在している可能性が高くなったのである。ではさらに周辺の調査成果に目を向けてみよう。

現在のところ、縄文時代晚期の遺構や遺物は遺跡の北方に集中している。最近の調査では突帯紋土器が比較的まとまって出土し（第2図A地点、以下同じ）、在地産と他地域産の双方の土器が存在することから、当該期の活発な活動を伺える資料となった。また周辺では滋賀里III～VI式に属する土器群も確認されており（B）、周辺にまとまった集落の存在が想定される。しかし、その系譜は一旦空白期を迎えると、続く弥生時代前期の遺構や遺物の分布はまとまりをみせない。

弥生時代中期になると、遺跡南半部の段丘面上に集落が営まれる（C）。現在までに複数の堅穴住居や掘立柱建物が確認され、集落域に近接して木棺墓なども確認されている^③。これらは地域の拠点的な集落と考えられ、時期的には概ね中期後半の短期間に営まれていたようである。この

集落の系譜を汲む可能性のあるものとして、男里遺跡から南東方向へ約2.5km離れた独立丘陵上に、高地性集落と捉えられる滑瀬遺跡^①がある。また男里遺跡の南西約2kmの山腹より、四区袈裟櫛紋銅鐸の出土が知られている。

弥生時代後期から古墳時代前期にかけては先述したとおり、遺跡の中央部の双子池周辺、すなわち旧河道周辺に集落が営まれているようである。先の調査では当該期に製塩活動が活発化したことと示唆する結果が得られている。また古墳時代後半になると、再び遺跡の北方へ活動の中心が移動するようである。当該期の構（D）^②や小石室（E）^③が確認されている。

飛鳥～奈良時代にかけては、双子池の周辺で掘立柱建物などが確認（F・G）されている^④。特に近年の調査では双子池の東方において、堅穴住居や掘立柱建物、また廃棄土坑などが確認された^⑤。これにより先述した河道の両岸に集落が営まれていたことが明らかとなった。

平安時代になると若干の活動範囲の拡大が伺え、双子下池の北東方向の地点で複数の掘立柱建物や廃棄土坑が確認（H・I）されている^⑥。このうち廃棄土坑からは多数の黒色土器が一括で出土しており、隣接する掘立柱建物が被災し、一括投棄されたものと考えられている。またこれらの集落から北へ約500mの戎畠遺跡の調査では、平安時代後半に廃絶したと考えられる大規模な灌漑用水路が確認されている。また当該期には遺跡の西部に光平寺が建立（J）される。

中世になると、遺構や遺物の分布が遺跡全域に拡がり、明確な活動域の拡大が明らかとなる。なかでも集落域と生産域の明確な区別がなされ、今日みられるような「集村」の端緒が求められるのである。特に周辺では、蛸壺や土錘などの漁撈具の出土が顕著であり、耕作と併せて漁撈にかける比重が高かったことが知られる。先の戎畠遺跡の調査では真蛸壺の焼成土坑がまとまって確認されており、地域の生産活動を知るうえで、非常に貴重な資料が得られている。

中世から近世にかけては活動範囲そのものには、大きな変化は伺えない。集落域、生産域ともに前代を踏襲しているようである。最近の調査では、近世における製糖に伴う遺物がまとまって確認されていることが注目される。

- 註 ① 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・II』（1997）
② 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・I』（1997）
③ 泉南市教育委員会『男里遺跡95-1区の調査』『泉南市遺跡群発掘調査報告書III』（1996）
④ 泉南市教育委員会『男里遺跡・II』『泉南市文化財年報No.1』（1995）
⑤ 泉南市史編纂委員会『第2章 古代の泉南』『泉南市史一通史編』（1987）
⑥ （財）大阪府埋蔵文化財協会『滑瀬遺跡』（1985）
⑦ 泉南市史編纂委員会『第1章 原始の泉南』『泉南市史一通史編』（1987）
⑧ 泉南市教育委員会『男里遺跡92-1区の調査』『泉南市遺跡群発掘調査報告書V』（1993）
⑨ ⑤と同じ
⑩ 泉南市教育委員会『男里遺跡発掘調査報告書』（1978）
⑪ 泉南市教育委員会『男里遺跡96-1区の調査』『泉南市遺跡群発掘調査報告書IV』（1997）
⑫ （財）大阪府埋蔵文化財協会『男里遺跡』（1993）
⑬ 泉南市教育委員会『戎畠遺跡発掘調査現地説明会資料』（1996）
⑭ 泉南市教育委員会『男里遺跡97-2区の調査』『泉南市遺跡群発掘調査報告書VI』（1998）



- 1 男里遺跡 2 光平寺跡 3 男里東遺跡 4 長山遺跡 5 山ノ宮遺跡 6 前田池遺跡 7 幡代遺跡
 8 幡代南遺跡 9 高田山古墳群 10 岡中西遺跡 11 岡中遺跡 12 奥ノ池遺跡 13 林昌寺跡
 14 林昌寺瓦窯跡 15 林昌寺銅鐸出土地 16 信之池遺跡 17 滑瀬遺跡 18 六尾遺跡 19 六尾南遺跡
 20 市場遺跡 21 海營宮池遺跡 22 海會寺跡 23 海會寺瓦窯 24 一岡神社遺跡 25 北野遺跡
 26 大苗代遺跡 27 仏性寺跡 28 中小路南遺跡 29 中小路遺跡 30 新伝寺遺跡 31 岡田東遺跡
 32 中小路北遺跡 33 中小路西遺跡 34 坊主池遺跡 35 岡田遺跡 36 岡田西遺跡 37 氏の松遺跡
 38 座頭池遺跡 39 本田池遺跡 40 専徳寺遺跡 41 戎畠遺跡 42 博井南遺跡 43 上代石塚遺跡
 44 天神の森遺跡 45 キレト遺跡 46 高田遺跡 47 男里北遺跡 48 福島遺跡 49 馬川遺跡
 50 下出北遺跡 51 室堂遺跡 52 平野寺(長楽寺)跡 53 向出遺跡 54 高田西遺跡 55 高田南遺跡
 56 和泉鳥取遺跡 57 雨山遺跡 58 向山遺跡 59 自然田遺跡 60 西畠遺跡 61 正方寺跡

第4図 遺跡分布図

第4章 調査の成果

第1節 基本層序及び遺構面の概略（第6図）

基本層序は、上層において調査区全体に鋼土を中心とする堤体構築に伴う盛土（黄橙色シルト、灰オリーブ色シルト、浅黄橙色粘質シルトなど）が認められる。その直下には包含層であるオリーブ黒色シルトが約20cmの厚さで確認されるが、上層の盛土には当層のブロック土が多量に含まれていることから、堤体構築の際に大きく削平されたと考えられる。また、平成8年度の調査で認められた弥生～古墳時代前期の包含層である黒褐色シルト層は、当調査区では確認されなかった。地山は黄褐色シルト及び暗褐色粘質シルトで、調査区北部ではT.P.+8.9m前後、南部では若干レベルを上げ、T.P.+9.2m前後を測る。遺構は地山面を中心に検出された。

調査区北端部の樋門部分では、堤体を立ち割る状態での調査となり、堤体の構築時期を示す資料は獲得できなかったものの、その構築にかかる土層の堆積状況が確認できた。

堤体は、地山直上からT.P.+10.8mまでの間は、砂及びシルトがほぼ水平に堆積している。また、その部分が還元しておらず、長い期間にわたって水の影響をうけていたことがわかる。なお、現在の堤体頂部の標高はT.P.+14.0m前後を測る。

第2節 遺構（P L. 1・6～10、第5～7図）

1. 流路（P L. 1・6、第6図）

調査区の南端で検出され、平面ではその肩を確認することができなかったが、断面からその規模を判断すると、南北13m以上、東西6m以上、深さ1.2mを測る。埋土は黄灰色細砂を中心に、褐色細砂、灰色細砂などが複雑に堆積しており、水流が速かったことがわかる。流路底面のレベルはT.P.+7.8m前後を測り、また底面には径0.1～0.2mの河原石が多量に確認された。埋土からの遺物の出土が認められないため埋没時期は不明であるが、レベルは北西方向に若干下がっており、平成8年度調査において検出された流路1と一連の可能性も考えられる。

2. 溝

S D01 (P L. 1・7)

樋門にあたる部分で検出された。堤体直下で調査区外に大きく幅を広げ、池の内部（南東方向）および外方向にむかってその幅がせまくなる。検出し得た規模は、全長約20m、幅2～6m、深さは約0.5mを測る。埋土は灰オリーブ色シルトである。溝底部のレベルはT.P.+8.2～8.5mを測り、池の中心に向かって下がっている。埋土からの遺物の出土は認められなかった。

S D02 (P L. 1 + 8 + 9、第5図)

杭No.A12-4Bの南西約3mの地点から南にむかってまっすぐに伸び、南西約7mの地点で南東側に緩やかに曲がる溝で、検出長は南北に約4m、東西に0.2~0.3m、幅0.4~1.4mを測る。断面は皿状を呈しており、深さは0.1~0.2mを測る。埋土は黄褐色土混じり灰色シルトである。遺物の出土はなく、形成時期や性格は不明である。

3. その他の遺構

土坑

S K03 (P L. 1、第7図)

杭No.A 6-17Qから北西に約2mの地点で検出された。平面は不整形で、長軸1.2m、短軸0.6m、断面は皿状を呈し、深さは約0.1mを測る。埋土は灰褐色シルトである。

S K05 (P L. 1、第7図)

杭No.A 6-19Sから北に約2mの地点で検出された。平面は不整形で、長軸1.2m、短軸0.7mを測る。断面は緩やかなU字状を呈し、深さ0.15mを測る。埋土は黒褐色粘質シルトである。

S K06 (P L. 1、第7図)

杭No.A 7-20Aから北西に約2mの地点で検出された。平面は不整形で、長軸2.8m、短軸1.4m、断面はややいびつなV字状を呈しており、深さは約0.8mを測る。埋土は黒褐色粘質シルトである。

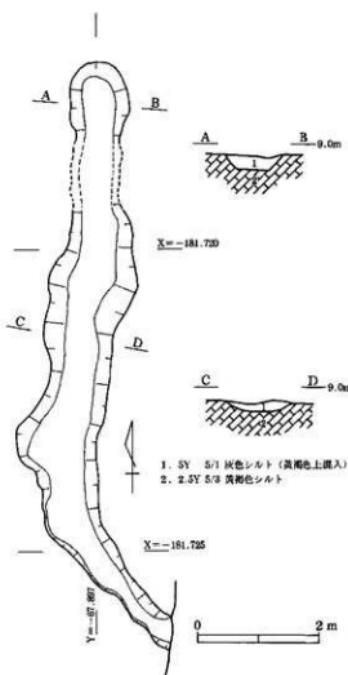
S K07 (P L. 1、第7図)

杭No.A 7-20Aから北に約3mの地点で検出された。平面は不整形で、長軸2m、短軸0.8m、断面は緩やかなU字状を呈しており、深さ約0.3mを測る。埋土は黒褐色粘質シルトである。

S K08 (P L. 1、第7図)

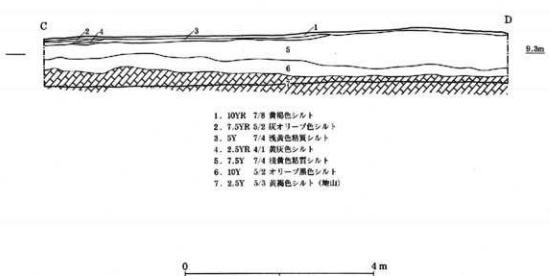
杭No.A 7-20Aから南に約1mの地点で検出された。平面は不整形で、長軸2.8m、短軸1.2m、断面は逆台形を呈し、南側では深く落ち込んでいる。深さは最深部で約0.4mを測る。埋土は黒褐色粘質シルトである。

これらの土坑からは遺物の出土が認められず、平面が不整形なものばかりであることから、倒木痕の可能性が考えられる。

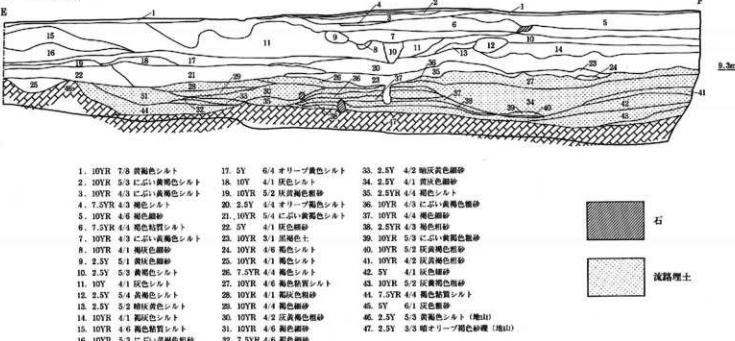


第5図 S D02平面図及び断面図

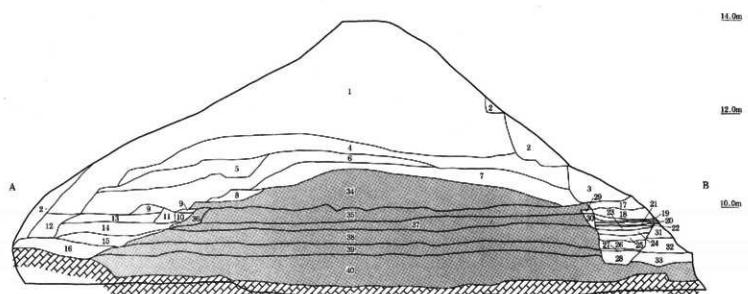
C-D間断面図



E-F 断面図



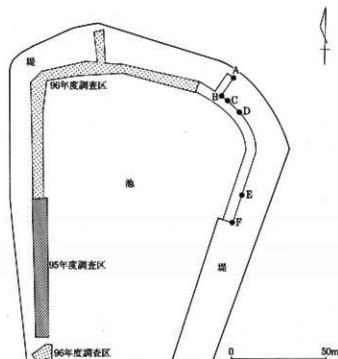
A-B 割断面図



1. 墓地	11. 10YR 3/4 黄褐色暗紅土	17. 2.5T 8.2 暗紅色土	23. 5.2Y 6.0 黃褐色土	29. 5.2Y 6.0 黃褐色土
2. 2.5Y 3/4 黄褐色土	15. 10YR 4/5 こげいろ暗褐色土	22. 5.7 7.6 暗褐色暗紅土	28. 5.2Y 6.0 黄褐色土	34. 2.5Y 4/5 暗褐色土
3. 2.5Y 4/5 暗褐色土	15. 10YR 5/5 黄褐色暗紅土	23. 6.1 6.1 暗褐色土	30. 5.2Y 6.0 黄褐色土	34. 10YR 2/3 黄褐色暗紅土
4. 10YR 7/2 黄褐色暗紅土	14. 10YR 6/1 黄褐色暗紅土	24. 3.7 7.6 暗褐色暗紅土	35. 5V 5/2 暗褐色暗紅土	34. 10YR 2/3 黄褐色暗紅土
5. 10YR 2/2 黄褐色暗紅土	15. 10YR 4/1 黄褐色暗紅土	25. 6.1 6.1 暗褐色土	35. 2.5Y 4/5 桃色暗紅土	35. 10YR 5/4 こげいろ暗褐色土
6. 10YR 4/1 黄褐色暗紅土	13. 10YR 3/3 黄褐色暗紅土	26. 2.5Y 8.4 暗褐色土	36. 10YR 5/4 こげいろ暗褐色土	35. 10YR 5/4 こげいろ暗褐色土
7. 2.5Y 3/4 黄褐色暗紅土	17. 2.5Y 4/1 黄褐色暗紅土	27. 2.5Y 7.6 暗褐色暗紅土	37. 3Y 4/2 暗褐色暗紅土	35. 10YR 5/4 こげいろ暗褐色土
8. 2.5Y 4/1 黄褐色暗紅土	15. 2.5Y 3/4 こげいろ暗褐色土	28. 2.5Y 8.2 暗褐色土	38. 5V 4/3 黄褐色暗紅土	35. 10YR 5/4 こげいろ暗褐色土
9. 2.5Y 4/1 黄褐色暗紅土	19. 2.5Y 4/1 黄褐色暗紅土	29. 2.5Y 4/4 黄褐色暗紅土	39. 2.5Y 4/3 黄褐色暗紅土	35. 10YR 5/4 こげいろ暗褐色土
10. 10YR 4/3 黄褐色暗紅土	19. 2.5Y 4/3 黄褐色暗紅土	30. 2.5Y 5.1 暗褐色土	40. 5V 4/3 黄褐色暗紅土	35. 10YR 5/4 こげいろ暗褐色土



第二部分

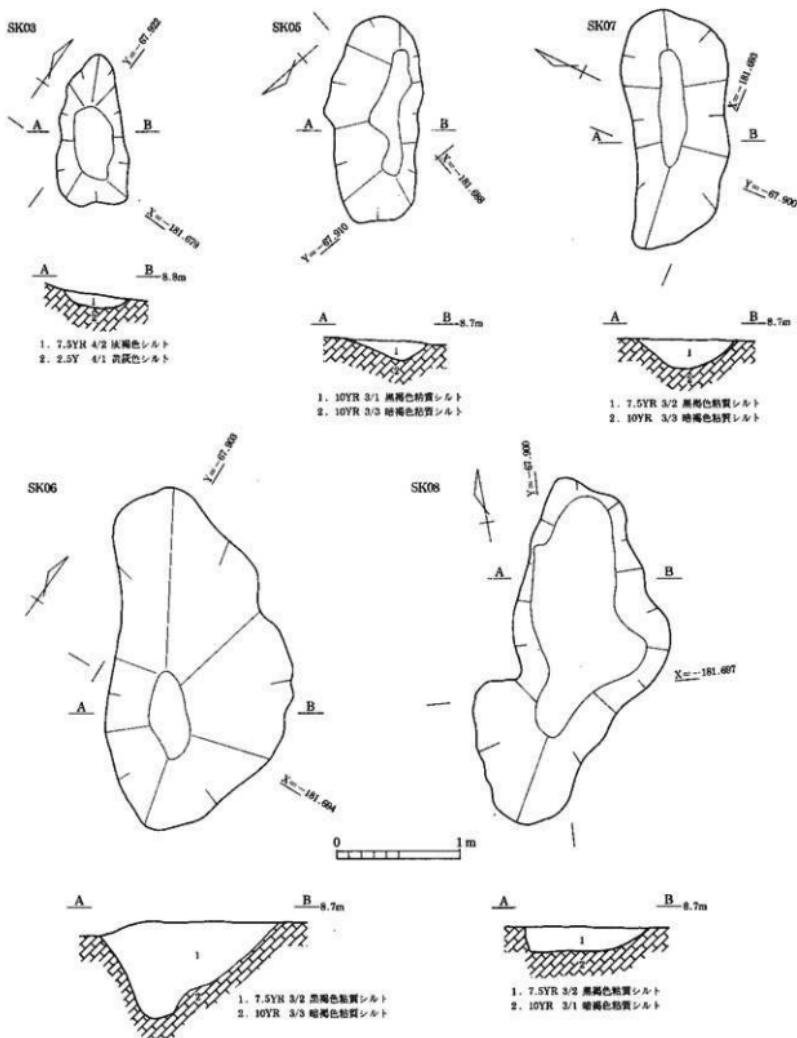


断面轮廓图

第6図 調査区断面図

ピット (PL. 1)

杭No.A 6-17Qおよび杭No.A 7-20Aの付近でピット (Pit01・02) を検出した。いずれも直徑約0.2m、深さ約0.1mを測る。埋土は黒褐色シルトである。



第7図 遺構平面図及び断面図

第3節 遺物 (P.L.11~13、第8図)

遺物は、土器、陶磁器、瓦、木製品などが出土した。今回図化できた遺物はいずれも包含層から出土しており、遺構からは出土しなかった。これらは、おおむね3時期に分けることができた。以下、時代を追って順に述べたい。

1~9は、弥生時代中期から後期の遺物である。

1~3は、やや大型の底部である。1は、体部に向かって一気に立ち上がる。外面は、二次焼成を受けて赤橙色を呈する。2は、体部に向かって大きく「ハ」の字に開く。3は、底部は垂直に立ち上がるが体部になると大きく「ハ」の字に開くものである。

4は、高杯の脚部である。脚裾部に向かって大きく開くが、脚柱部に向かっては急激に立ち上がっているものと考えられる。裾端部から上方1cmには径0.8cmの穿孔を有する。

5~7は、やや小型の底部である。5は、外面にタタキ目を有する甕と考えられる。6・7は、最も小型である。6は平底であるが、7はわずかに上げ底を呈する。

8・9は、高杯または台付椀の脚部である。8は脚裾部に向かってほぼまっすぐに広がるが、9は、大きく外反して広がっている。いずれも中実で断面は円形を呈する。

10~17は、飛鳥時代から奈良時代の遺物である。

10は、須恵器の甕の口縁部である。体部から口縁部に向かって大きく広がり、下方へ拡張される。端部は上方へつまみ上げられる。11・12は、杯蓋と考えられる。11は肩部に稜を持たないもので、12は天井部が未調整になっている。

13は、土師器の高杯の脚部である。全面が二次焼成を受け赤橙色を呈しており、カマドの支脚等に転用された可能性がある。

14~16は、須恵器の杯である。14は、小型の口縁部である。15・16は、断面逆台形の高台が付くものである。

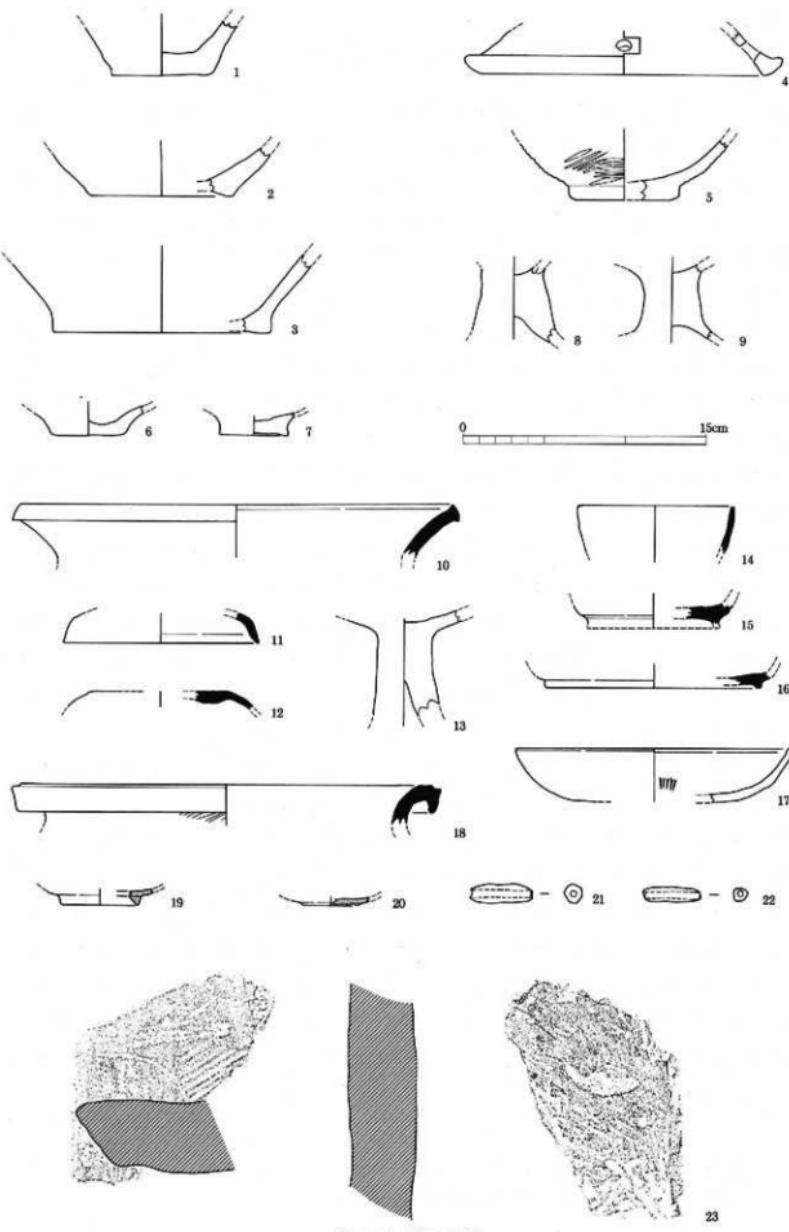
17は、土師器の皿である。口縁部から底部に向かって緩やかに内彎し、内面には放射状のヘラミガキがわずかに認められる。

18~23は、平安時代後期から中世の遺物である。

18は、須恵器の甕である。短い口縁部で大きく外反し、端部は下方へ拡張されている。19・20は、椀の高台部分である。19は、黒色土器である。摩滅が著しいため外面は炭素の吸着が確認できないが、内面にはわずかに確認できる。20は、瓦器椀である。高台断面は半円形の粘土紐を張りつけただけの簡素なものである。

21・22は、土錘である。いずれも管玉状を呈する小型のものである。

23は、平瓦である。側縁部のみ遺存しており端部は欠損している。凹面には、糸切りおよび布目痕が認められ、側縁付近だけを側縁と平行にヘラ状工具でナデ消している。凸面は、糸切りの後に、ヘラ状工具や指でナデ消しており指頭圧痕が多く認められる。



第8図 出土遺物

第5章　まとめ

前章までにおいて、平成9年度の調査成果を述べてきたが、ここでは双子池を中心とする遺構・遺物について、過去2年の調査成果を含めてまとめておきたい。

先に述べたように、男里遺跡周辺の地形は遺跡のはば中心に、南北に旧河道が存在し、その左岸には自然堤防と沖積段丘、その右岸には沖積段丘が広がっている。現在の男里集落は双子池の西側の自然堤防上に位置している。双子池は男里遺跡のはば中央に位置しており、旧河道の痕跡と考えられてきた。

男里遺跡の調査は行政機関によって昭和52年度から小規模ながら徐々に進められてきたが、近年の関西空港建設に伴う開発に伴い、比較的大規模な調査が増加したため、急速に遺跡の内容が明らかになりつつある。なかでも双子池内部の調査は歴史的におこなわれており、ここではその成果を時代ごとにまとめておきたい。

本遺跡内では縄文時代の遺構・遺物も確認されているが、双子池内部の調査では弥生時代後期の遺物が確認されているにとどまっている。また遺物を含む明確な遺構としては庄内式併行期の河道1や溝が最も古い^①。泉州地域における当該期の遺跡は熊取町大久保遺跡、泉佐野市湊遺跡などしかなく、調査例の少ない時期である。本遺跡では娟壺や土錐、脚台式の製塩土器も伴出しており、調査区周辺の近接したところに当該期の集落の存在がうかがえる。飛鳥時代から奈良時代の遺構としては、河道2^②、流路1や「しがらみ」^③などが検出されている。特に河道2の出土遺物に、窯体及び焼け歪みや自然釉の付着する須恵器がみられ、このことから周辺に須恵器窯の存在が推定される。なお、この「しがらみ」は7世紀後半のものである。

過去の調査では以上の調査成果がまとめられている。今回の調査区では堤体の樋門部分において還元を受けている土層を確認したことと、流路を検出したことが成果といえよう。しかし遺物の出土量は絶対的に少なかった。特に遺構からの出土がなく、それぞれの時代の特定を困難なものとしている。遺物の出土量が少ないことは近年の削平によるものとも考えられるが、弥生時代中期の集落は双子上池の東部の段丘面に、庄内式併行期の集落は双子下池周辺に、飛鳥時代の集落は双子池西側の自然堤防上に展開していた、というこれまでの集落範囲の推定を考えあわせるならば、当該調査区、双子下池北東縁付近では実際に居住密度が低かったと考えることも可能である。本調査成果は從来の集落に関する推定を補強するものであるかもしれない。しかし現状では確実な根拠に乏しく、この推測の当否について判断を下すためには、今後の調査成果の蓄積を待たなければならない。

註 ① 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・I』(1997)

② 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・II』(1997)

報 告 書 抄 錄

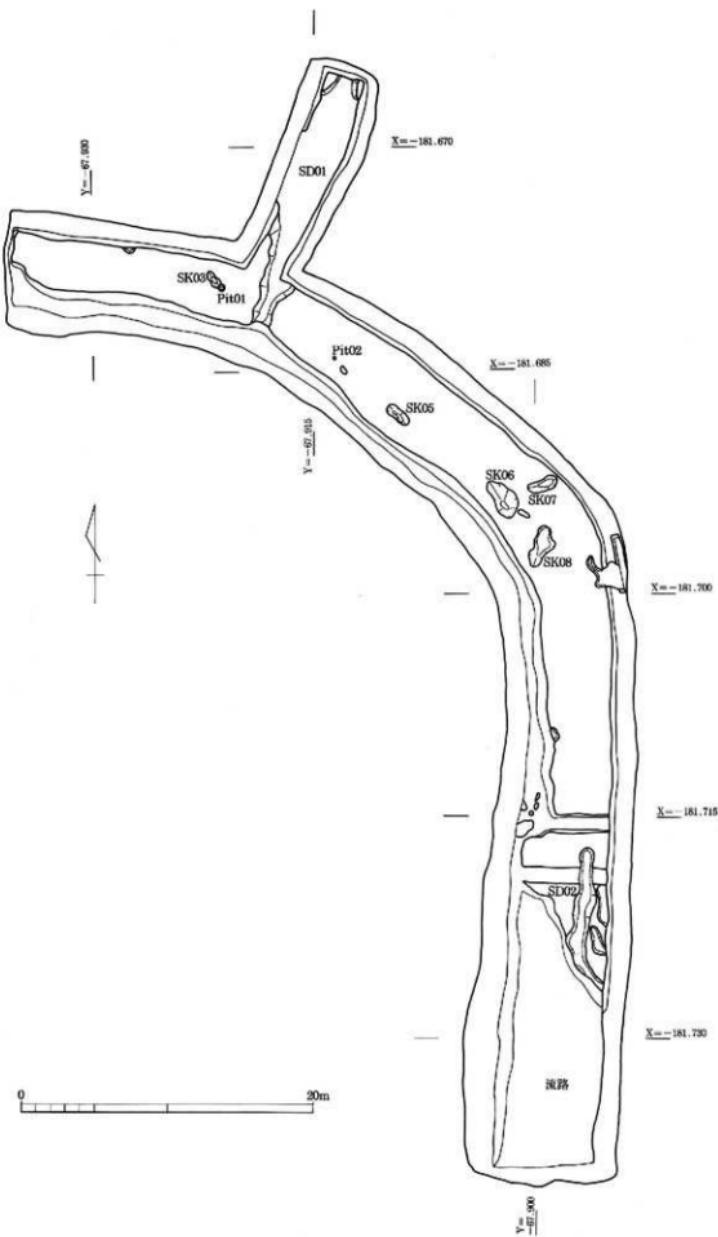
ふりがな	おのさといせきはくつちょうさがいよう・Ⅲ							
書名	男里遺跡発掘調査概要・Ⅲ							
副書名	府営地域総合オアシス整備事業（泉南地区・双子池改修工事）に伴う							
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	上林史郎・大野路彦							
編集機関	大阪府教育委員会 文化財保護課							
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 TEL.06(941)0851							
発行年月日	西暦 1998年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村・遺跡番号	北緯 ...	東経 ...	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因	
おのさといせき 男里遺跡	せんなんし おのさと 泉南市男里 もない 地内	27228	12	34° 21' 30"	135° 15' 40"	1997年9月25日 ～ 1998年3月31日	600m ²	溜池堤体 改修工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
男里遺跡	集落	弥生～中世	流路・溝・土坑・ ピット		弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・瓦			

図版



調査区全景

P L. 1 造構配置図



P L . 2 調査区全景



南から



南西から

P L . 3 調査区北半部①



西から



垂直

P L . 4 調査区北半部②



南から



南東から

P L. 5 調査区南半部



東から



垂直



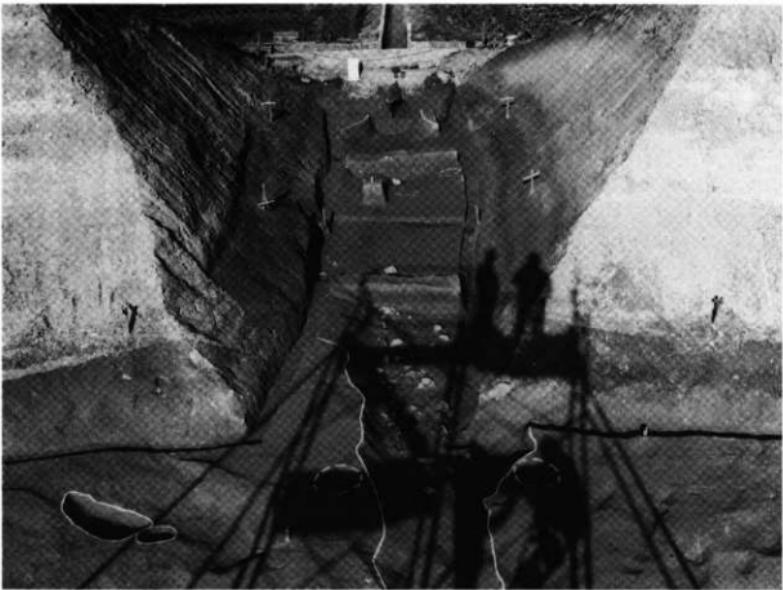
流路（西から）



流路断面（西から）



S D01 (南西から)



S D01 (南から)



流路・S D02 (北西から)



S D02 (南から)



S D01 A-B断面（南から）



S D01 C-D断面（南から）



堤体断面（西から）



土坑群（西から）

